六曲一双　松鶴（しょうかく）図屏風

落款には「養渓惟房（ようけいこれふさ）書」とあります。養渓惟房は江戸時代の木挽町狩野派の絵師です。日本書家辞典人名編（大学堂書店刊）によれば「竹澤養渓、名は惟房。養川院（ようせんいん）の門人なり。白川少将に仕え、江戸木挽町（こびきちょう）に住す。」とあります。白川少将とは、奥州白河藩主松平定信のことで、老中として寛政の改革を行った人です。この定信の二女が村上藩主内藤信敦（のぶあつ）に嫁しており、その信敦夫人（玉振院（ぎょくしんいん））が持参したものと伝えられています。

六曲一双　源氏物語図屏風

江戸時代中期頃の作といわれています。題材は表題の通り、源氏物語の前半部分（須磨）を描いたものです。本屏風には落款がないこと、源氏物語を題材にしていることから、物語の中盤以降を描いたものも存在すると考えられますが、所有者が京都で購入した時には既に散在していたようです。作風から土佐派の流れをくむ人の作ではないかと思われ、細かな描写や重厚な色使いなどから見ても素晴らしい作品であるといわれています。

六曲一双　荒磯に鷲図屏風

作者は社殿の彫刻や彫漆に秀で村上堆朱の基礎を築いた有磯周斎（ありいそしゅうさい）です。幕末に荒磯に鷹の図を彫刻した大衝立を制作、これが藩侯より幕府に献上され名声を博しました。この功により、名字帯刀を許され有磯周斎と名乗るようになりました。

日本画は五十嵐華亭（いがらしかてい）に師事したと伝えられていますが、村上市内にいくつかの優れた作品を残しています。本屏風もそのひとつで、眼下の獲物を狙う鷲を力強く確かな筆の運びで表現したものです。

六曲一双　花鳥図屏風

作者は有磯周亭（ありいそしゅうてい）で、周斎の孫にあたります。上京して、絵を南画家滝和亭（たきかてい）に学び、画風は清淡で、草花図を得意としました。また、本業の堆朱・堆黒にも、絵の技法を応用した精緻な彫堆朱の小品や漆絵の優れた作品を残しています。さらに多くの門弟を指導する一方、自らも研鑽に努め、海外諸国の展覧会等にも出品し、村上の堆朱堆黒に新生面を開きました。本屏風には得意とした花鳥図を季節ごとに描いております。

二曲一双　荒海に海鳥図屏風

作者は村上出身の日本画家長嶋北彩（ながしまほくさい）。大正 7 年に上京して川端画学校に入り菊池華秋（きくちかしゅう）に師事し、大正 12 年には川合玉堂の門下生となります。昭和 5 には帝展に初入選。昭和 20 郷里村上に疎開しますが、昭和 30 年に再び上京し、日本美術院展、創造美術展、新世紀美術会展などに出品し、文部大臣奨励賞などを受賞しました。平成 10 年没。享年 94 歳。

六曲一隻　山水図屏風

作者は久永期以とあります。ヒサナガトキシゲと読みます。寛政 10 年(1798)頃村上藩の大目付を勤める浅井家に生まれ、藩の家老久永期貞（ときさだ）の養子となり、後に家老職について期以と名乗りました。通称を惣左衛門（そうざえもん）といい、江戸在勤の時に、谷文晁に師事し、山水画を得意としました。晩年は村上で隠居生活を送りました。

本屏風の落款には「癸亥（みずのとい）　六十七叟期以筆」とありますので、文久 3 年（1863）に期以が 63 歳のときに描いたものです。

六曲一双　黒川俣小学校銀屏風

明治 32 年の黒川俣小学校の新築に際し、福岡孝弟（ふくおかたかちか）、副島種臣（そえじまたねおみ）、大鳥圭介（おおとりけいすけ）、清浦圭吾（きようらけいご）、渋沢栄一（しぶさわえいいち）など明治の政治家・軍人・文化人等 90 名より贈られた自筆の色紙が貼られた珍しい屏風です。

なぜ黒川俣小学校の新築祝いに祝金を添えて色紙が届けられたのかを示す資料は残されていませんが、これまでの調査では、村上の資産家で、教育面の普及発展に私財を投じて尽力した佐藤伊助(当時衆議院議員)の存在があったのではないかと考えています。